

主 文

本件上告を棄却する。

理 由

弁護人阿部正一の上告趣意のうち、憲法三十八条三項違反をいう点は、原判決が是認した第一審判決は、判示第二及び第三の一ないし四の各事実の証拠として、被告人の自白のほか供与の申込みを受けた者の証言、受供与者の検察官に対する各供述調書等をも挙示しており、右証拠は、被告人が各実行行為の全部を自ら行つた本件においては、補強証拠として十分なものと認められるから、所論は前提を欠き、判例違反をいう点（「昭和二十九年（あ）第一〇六五号同三二年五月二十八日最高裁大法廷判決」とあるのは「昭和二十九年（あ）第一〇五六号同三三年五月二十八日最高裁大法廷判決」の誤記と認める。）は、所論引用の判例は、本件と事案を異にし適切でないから、刑訴法四〇五条の上告理由にあたらぬ。

よつて、同法四一四条、三八六条一項三号により、裁判官全員一致の意見で、主文のとおり決定する。

昭和五五年九月一〇日

最高裁判所第二小法廷

裁判長裁判官	木	下	忠	良
裁判官	栗	本	一	夫
裁判官	塚	本	重	頼
裁判官	鹽	野	宜	慶
裁判官	宮	崎	梧	一